

山口県埋蔵文化財調査報告 第127集

こう でん
神 田 遺 跡

—平成元年度県営圃場整備事業に伴う発掘調査報告—

1990

財団法人山口県教育財団
山口県教育委員会

序

山口県では、豊かな地域社会の実施に向けて農業基盤整備事業等の諸施策を実施しています。

私たちの県土山口を築いてきた先人のその永い営みを今に伝える数多くの歴史的遺産を、こうした開発との調整を図りつつ記録にとどめて後世に残すため、財団法人山口県教育財団では、教育・文化の振興という立場から、本年度も山口県農林部の委託を受け、園場整備地区に係わる埋蔵文化財の発掘調査を実施いたしました。

ここに報告いたしました美祿郡美東町大字長田字神田所在の神田遺跡の調査では、弥生時代と中世の集落跡が発掘され、土器や鉄器などの遺物が発見されました。

これらの資料は、当時の人々の生活を知る上で、貴重な手掛かりを与えてくれました。

この発掘調査の成果をまとめた本書が、学術・教育の資料として利用されることはもとより、ふるさとづくりの基礎資料として広く活用されることを期待するものであります。

調査に当たりまして、御指導、御協力をいただきました関係各位に対し、深甚なる謝意を表すものであります。

平成2年2月

財団法人山口県教育財団

理事長 高山 治

序

本県では、恵まれた自然環境のなかで豊かな地域社会の実現に向けて、農業基盤整備事業等の諸施策を推進しています。

こうした開発工事からかけがえのない埋蔵文化財を保護し、併せて、開発と文化財保護との調和のとれた県土づくりを目指して、山口県教育委員会は関係機関と協議を行い、遺跡の保存や発掘調査を実施しているところです。

平成元年度は、美祿郡美東町大字長田字神田に所在する神田遺跡の発掘調査を実施し、弥生時代及び中世の集落跡を発見するとともに、当時の人々の生活や文化を知るうえで数多くの貴重な資料を得ることができました。

本書は、その調査成果をまとめた記録であり、文化財受継への理解を深め、教育並びに学術研究の資料として広く活用されることを願うものであります。

おわりに、発掘調査の実施に当たり御協力いただいた関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成2年2月

山口教育委員会

教育長 高山 治

例 言

1. 本書は、県営園場整備事業に先立って平成元年度に実施した美祿郡美東町大字長田字神田に所在する神田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書は、財団法人山口県教育財団が山口県農林部の委託を受けて実施した調査と、文化庁の国庫補助を得て山口県教育委員会が実施した調査の成果を合わせて報告するものである。
3. 調査組織は次のとおりである。

調査主体 財団法人山口県教育財団 (理事長 高山 治)

山口県教育委員会 (教育長 高山 治)

事務局 財団法人山口県教育財団 (事務局長 田中義人)

山口県教育委員会文化課 (課長 山田泰久)

調査担当 【総括】山口県埋蔵文化財センター (所長 山田泰久)

(次長 中村徹也)

【調査員】財団法人山口県教育財団事務局 指導主事 松島幸夫

福坂通泰

山口県埋蔵文化財センター 文化財専門員 西岡義貴

【援助】山口県埋蔵文化財センター職員

4. 発掘調査の実施にあたっては、山口県農林部耕地課・山口県山口土地改良事務所・美東町役場・美東町教育委員会並びに地元関係各位から協力・援助を受けた。
5. 出土石器の鑑定については、山口県立山口博物館専門学芸員橋本恭一氏の御教示を得た。
6. 本書に掲載した地図は、国土地理院発行50,000分の1地形図を複製した「美東町全図」(美東町役場・髙アシア建設コンサルタント作成)を使用したものである。
8. 本書で使用した遺構略号は次のとおりである。
SB: 堅穴住居 B: 掘立柱建物 SD: 溝 SE: 井戸
SK: 土壇 SX: 用途不明 SP: 柱穴
9. 本書の作成・執筆は、松島・西岡・福坂が分担し、福坂が編集した。

目 次

I	位置と環境	1
II	調査の経緯と概要	2
III	遺 構	4
	1. 竪穴住居	4
	2. 掘立柱建物	13
	3. 土 壇	15
	4. 井 戸	16
	5. 溝	17
	6. その他の遺構	18
IV	遺 物	19
	1. 弥生土器	19
	2. 中世の軟質土器類	20
	3. 石 製 品	20
	4. その他の遺物	20
V	ま と め	22

図 版 目 次

図版第1 上: 遺跡全景 (空中写真)	図版第9 上: SE-1 (北から)
下: 遺跡遺構 (東から)	下: SX-2 (東から)
図版第2 上: 遺跡全景 (空中写真)	図版第10 B-12柱穴壺出土状況
下: 調査区北側 (西から)	B-12柱穴壺出土状況
図版第3 上: 調査区南側 (西から)	SB-5土器出土状況
下: SB-1 (北から)	SB-6壺出土状況
図版第4 上: SB-2 (北から)	SB-1台付鉢出土状況
下: SB-3炭化材出土状況 (東から)	SD-5五輪塔出土状況
図版第5 上: SB-3 (東から)	SK-7土師質土器の皿出土状況
下: SB-4 (東から)	SB-4石製紡錘車出土状況
図版第6 上: SB-5 (西から)	図版第11 弥生土器
下: SB-6 (北から)	図版第12 上: 中世の軟質土器
図版第7 上: SB-7 (北から)	中: 石器、ガラス小玉、鉄錐
下: SB-8 (南から)	下: 五輪塔
図版第8 上: SB-10 (北から)	
下: SD-3・SD-4 (西から)	

挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置と周辺遺跡分布図……………1	第14図 掘立柱建物実測図……………14
第2図 調査区設定図……………3	第15図 土塼実測図(1)……………15
第3図 SB-1実測図……………4	第16図 土塼実測図(2)……………16
第4図 遺構配置図……………5~6(折込)	第17図 土塼実測図(3)……………17
第5図 SB-2実測図……………7	第18図 SE-1実測図……………17
第6図 SB-3, SB-4実測図……………8	第19図 SD-3・SD-4断面実測図……………18
第7図 SB-5実測図……………9	第20図 SX-2実測図……………18
第8図 SB-6実測図……………10	第21図 弥生土器実測図……………19
第9図 SB-7実測図……………11	第22図 中世の軟質土器類実測図……………20
第10図 SB-8実測図……………11	第23図 石器実測図……………21
第11図 SB-9実測図……………12	第24図 五輪塔実測図……………21
第12図 SB-10実測図……………12	第25図 ガラス小玉実測図……………21
第13図 SB-11実測図……………13	第26図 鉄錐実測図……………21



上：遺跡全景（空中写真）
下：遺跡遠景（東から）

図版第 2

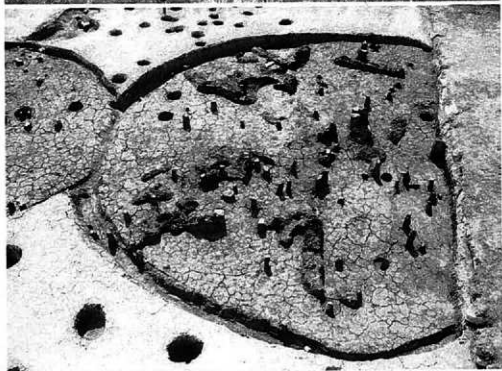
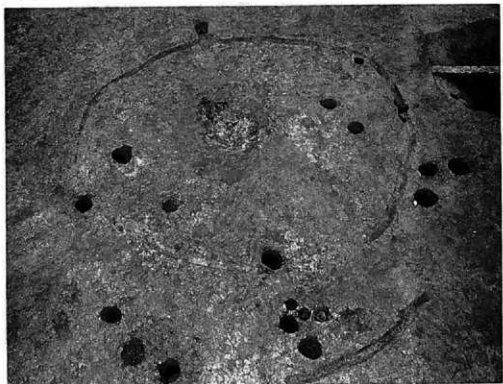


上：遺跡全景（空中写真）
下：調査区北側（西から）



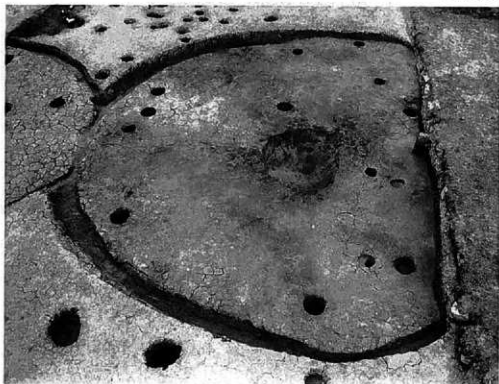
上：調査区南側（西から）
下：SB-1（北から）

図版第 4



上：SB-2（北から）

下：SB-3炭化材出土状況（東から）

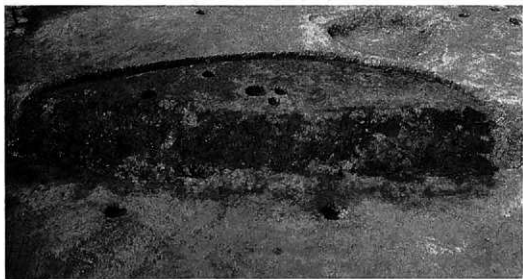
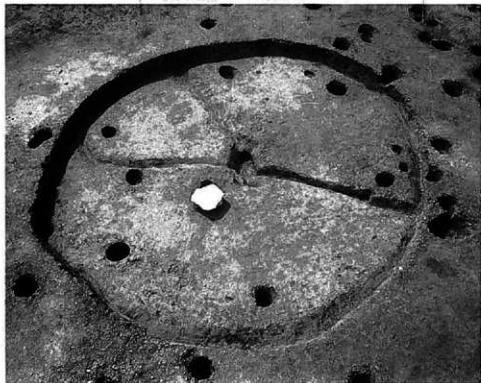


上: SB-3 (東から)
下: SB-4 (東から)

図版第 6

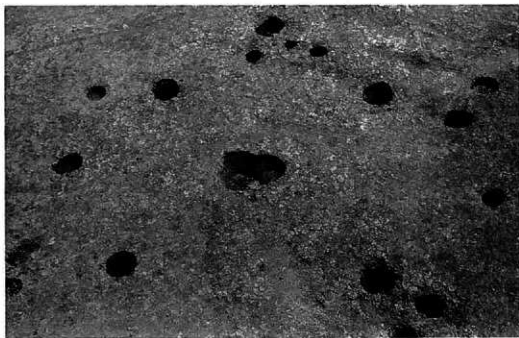


上：SB-5 (西から)
下：SB-6 (北から)



上：SB-7 (北から)
下：SB-8 (南から)

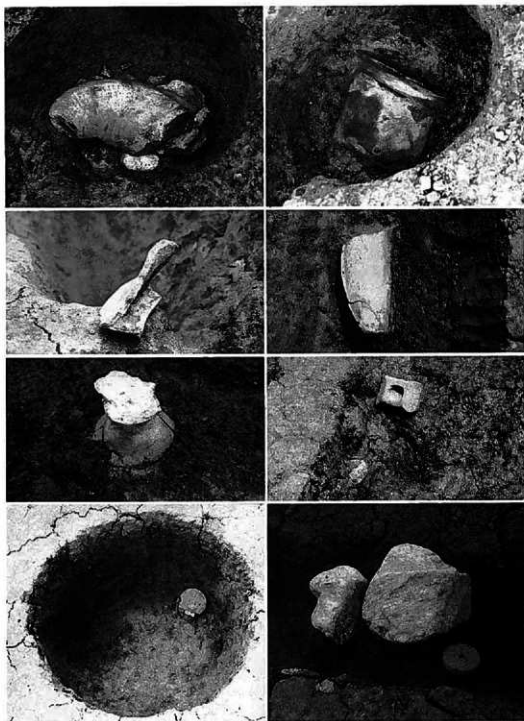
図版第 8



上：SB-10 (北から)
下：SD-3 SD-4 (西から)



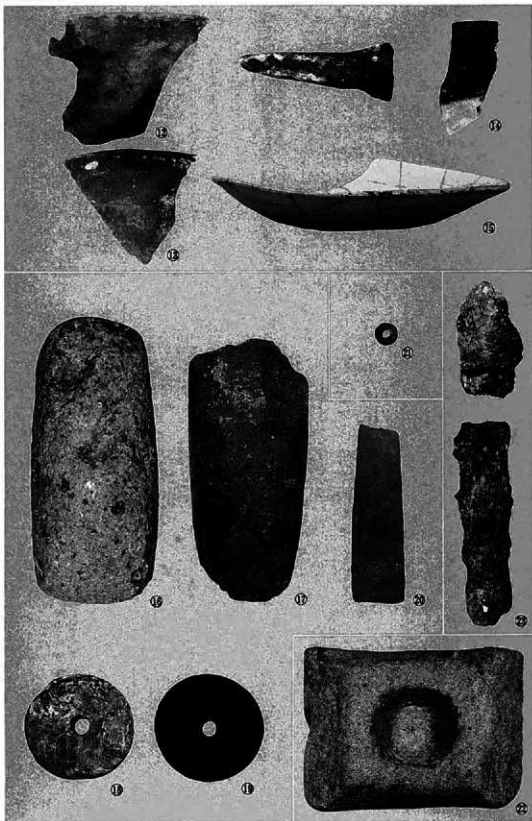
上：SE-1（北から）
下：SX-2（東から）



B-12 柱穴壺出土状況	B-12 柱穴壺出土状況
SB-5 土器出土状況	SB-6 壺出土状況
SB-1 台付鉢出土状況	SD-5 五輪塔出土状況
SK-7 土師質土器の皿出土状況	SB-4 石製紡錘車出土状況



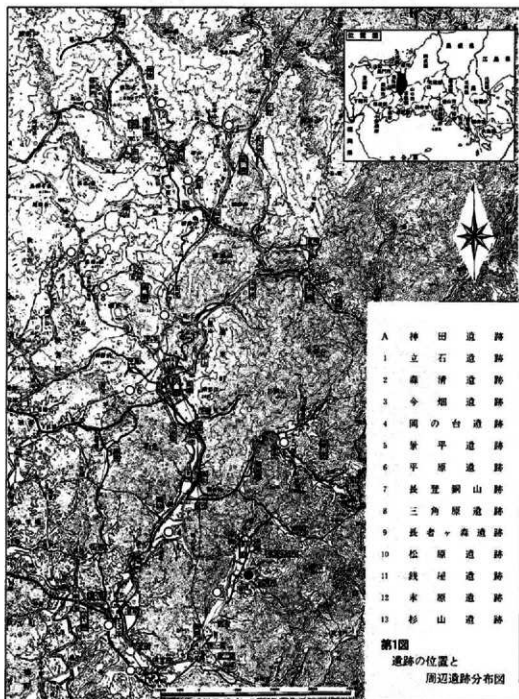
弥生土器



上：中世の軟質土器 中：石器 ガラス小玉鉄鈍
下：五輪塔

I 位置と環境

本遺跡は、美祿郡美東町大字長田字神田(こうでん)に所在し、遺跡名を神田遺跡ニシタと名付ける。美祿郡美東町は、山口県のほぼ中央に位置し、南東部は県都山口市に境を接している。東と北側には500m～700m級の山々が連なり、西側には日本最大のカルスト地形秋芳台がある。それ



ら山間の谷や鍾乳洞からの流水を集めた大田川が、南流して厚東川に注いでいる。

大字長田は南北に長い美東町の南部に位置し、字神田は江嶺山の山麓・宮の河内地区に形成された舌状台地の先端にあたる。

台地上には平安末期の創建になる長田八幡宮(現在は、真長田八幡宮として合併移転)が鎮座し、本調査区は、往時流鏑馬がなされたその参道を挟んで設定されている。傍らには、八幡宮勧請以前からの御神木(現在は、枯死)や観音堂(「地下上申絵図」には、釈迦堂と記す。)もあり、村人にとってこの丘陵は古くから信仰の地であったことが窺える。

丘陵上の本調査区から南西方向を見下ろすと、長田川を隔てて、昭和62年に発掘調査が行われた立石遺跡が眺望できる。立石遺跡は、縄文時代から中世にかけて間歇的に形成された集落・埋葬遺跡である。縄文時代のものとしては、後晩期の土器片と黒曜石の剥片類が出土している。古墳は、後期の円墳が4基発見され、須恵器・土師器・耳環・鉄器が副葬されていた。これらの古墳は長田川の氾濫原の微高地に築造されており、特異な立地が目される。平安時代～室町時代のものとしては、掘立柱建物群や土壌などが発掘されている。

立石遺跡以外にも美東町内には遺跡が少なくない。縄文時代では、カルスト台地上の遺跡として著名な長者ヶ森遺跡での黒曜石剥片や赤塚佐山台でのチョッパーの採取などが知られているが、遺構については確認されていない。次いで弥生時代に入ると、絵堂の松原遺跡と綾木の岡の台遺跡が町内屈指の集落遺跡として知られている。古代以降としては、昭和62年に調査が行われた赤塚の銭屋遺跡が、毛利藩の寛永通宝の鋳銭所跡として全国的にも数少ない貴重な遺跡である。また近年長登銅山は、スラグの成分分析結果から、東大寺の大仏鑄造にあたって銅の供給地であったことがわかり、脚光を浴び本格的な調査が開始された。

II 調査の経緯と概要

神田遺跡は長田川東岸の舌状台地に立地しており、弥生時代から中世にかけて間歇的に形成された集落遺跡である。

近年、県内では各地で農業基盤整備事業が進められており、水田景観は大きく変貌をとげつつある。遺跡の所在する美東町長田地区についても、昭和60年度以後、県営園場整備事業による大規模な農業開発が行われている。こうしたなか、山口県教育委員会では事業の円滑な推進と文化財保護との調和を図るため、広範囲にわたって昭和63年度に事業施工予定地の予察調査を実施した。その結果、大字長田字神田地内から弥生土器を伴う貯蔵穴が発見され、当該地区一帯が遺跡包蔵地であることがわかった。そこで字名をとって「神田遺跡」(こうでん)と命名し遺跡発見の手続きが取られるとともに、県農林部耕地課と今後の取り扱いについて協議がなされた。遺跡周辺の事業実施は平成元年度となり、当該年度に事業と併行して発掘調査を実施することになった。

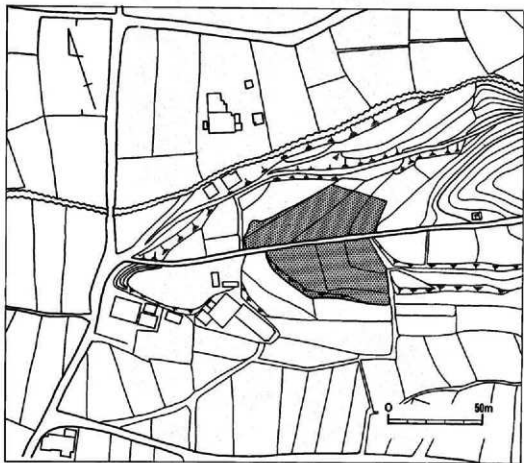
調査は、財団法人山口県教育財団が山口県農林部から委託を受け、さらに山口県教育委員会

が文化庁の国庫補助を受けて両機関が共同で行うこととなり、平成元年5月1日着手平成元年8月25日に終了した。

調査に際しては、前年度に行われた予察調査によって遺構の確認された地点を中心に、計15本のトレンチを設定して遺構の広がりや分布密度を確認し、計6筆の水田にまたがる箇所について面的な発掘を行うこととした。

各地区の基本的な層序は、①耕土(厚さ20cm)、②床土(厚さ約10cm)、③黄褐色～灰黄褐色粘質土(地山)となっている。北端部は床土下に遺物包含層が観察され、北方向に緩傾斜する地山面に沿って堆積している。遺構が検出されるのはいずれも黄褐色・灰黄褐色粘質土の上面であり、遺存状況からみて各遺構の上面は後世の土地削平をうけているものと判断され、特に後世の水田開発で旧地形が削平されたものとみられる。

遺構は各地区ともほぼ全面にわたって分布しており、弥生時代の竪穴住居、掘立柱建物、土壇、中世の掘立柱建物、溝、井戸などのほか、弥生時代と中世とに属する柱穴が多数検出された。(第4図) 弥生時代の住居群は、調査区中央から西側に舌状台地の先端部に向かった形で分布している。地形から考えて西へ若干広がる可能性はあるが、ほぼ完結したあり方を示すものとみてよいであろう。中世の遺構は、さらに東側に広がりをもつものと推定される。



第2図 調査区設定図

Ⅲ 遺 構

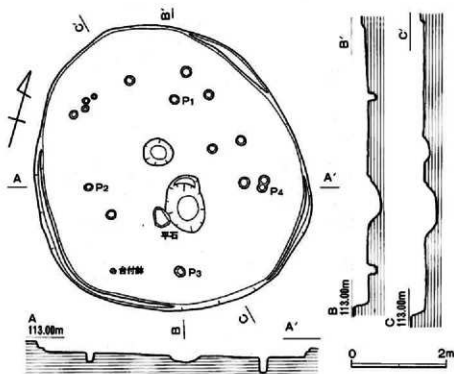
1. 竪穴住居

検出された弥生時代の竪穴住居は11軒であり、すべて円形ないし不整形円形プランを持つ。11軒の竪穴住居のうち、後世の削平により1軒は全体の四分の一程度しか検出されず、3軒は、床面と主柱穴のみ検出したにとどまった。住居群は、舌状台地の先端部方向（調査区のほぼ中央部から西側）に集中している。この中で、重なり合って時期の先後がみられる住居は、SB-3とSB-4と名付けた住居である。（以下、竪穴住居はSBとして記述する。）

住居群の時期は、出土する遺物が少ないためはっきりしないが、弥生時代中期に属するものが5軒、弥生時代後期に属するものが1軒と考えられる。住居が建て替えられたものもあり、また出土する土器の時代幅を考慮すると、同一時期には最高4軒程度の住居跡が存在したものと思われる。

SB-1

調査区北側、西端部（舌状台地の先端部）に位置する。長軸6.2m、短軸5.6m、床面積は約



第3図 SB-1実測図

27.5㎡（8.3坪・16畳強）の規模を持つ円形住居である。主柱穴は4本であり、間隔は2.6mとほぼ一定している。残存する壁の高さは20cm～30cmで、内外には周溝は検出されなかった。中央土壇（屋内炉）のそばに工作台または調理台と思われる平石が置かれている。



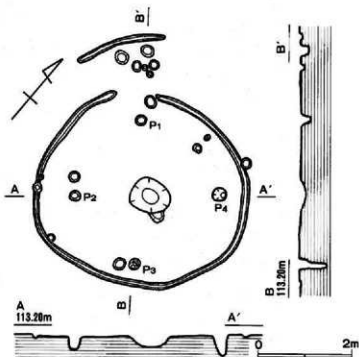
第4图 遺構配置図

埋土は上部がにぶい褐色粘質土、下層が灰褐色粘質土の二層であるが、いずれも人工的に埋められている。遺物は同層と床面から出土する。上層から掘りこまれた長軸64cm、短軸56cmの円形の土塊と、下層から掘りこまれた長軸106cm、短軸80cmの長円形の土塊が検出されたことから、この住居は新旧二時期にわたり造り変えられていると考えられる。つまり最初の住居(第一次住居)が廃絶した後、床面上に埋土を行い平坦に貼り床状に造りなおし、それと同時に平面径をわずかに拡張している。

出土遺物は細片が多く、数も少ない。わずかに台付き鉢(第21図11)が第一次住居床面から出土した。

SB-2

調査区北側、SB-1の東に位置する住居である。後世の削平を受け遺存状態は良くない。わずかに残った幅8cm、深さ5cmの周溝底のプランから円形住居とみられ、直径4.4m、床面積約13.2㎡(4坪・8畳)の規模を復元できる。この周溝は北西部で一部切れる。主柱穴は4本で、約2m～2.4mの間隔で配置される。中央には直径70cm、深さ20cmの円形の屋内炉を持ち、その埋土には炭が詰まった黒色粘質土が検出されている。



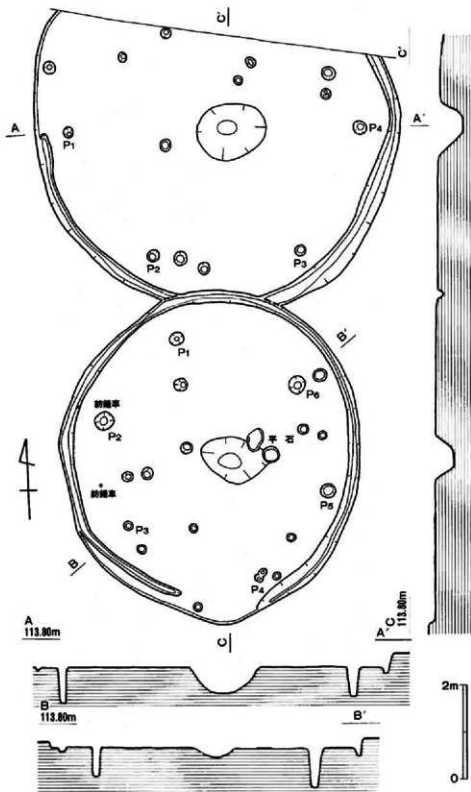
第5図 SB-2実測図

周溝の切れる部分から1.2m北西に、長さ1.8m、幅10cm、深さ6cmの溝とその間に対をなす二つの柱穴が検出された。入り口の施設があったと思われる。

出土遺物は弥生土器片が若干出土した。

SB-3

調査区南側、西端部に位置し、南部をSB-4に切られる。直径7.6mの円形をなし床面積約34.6㎡(10.5坪・21畳)の規模を持つ。北側は旧参道に切られており、主柱穴は4本までは確認された。それらの間隔から推測すると、本来は6本壁面に沿ってほぼ当間隔で配列されていたものと思われる。幅10cm～24cm、深さ10cmの周溝がめぐるが西側で切れる。残存壁高は20



第6圖 SB-3・SB-4実測図

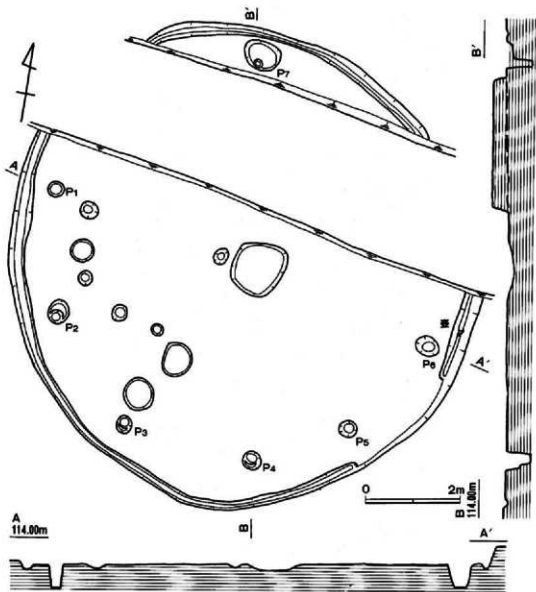
cm-30cmで、中央には160cm×120cm、深さ50cmの長円形の屋内炉が掘りこまれている。埋土は黒褐色粘質の単一土である。

床全面には、屋根の部材の原型をとどめた状態の炭化木、焼土が散乱して検出された。この住居が火災により焼け落ちた事実を示すものとして注目されよう。

遺物は、弥生土器片・鉄錐（第26図）が出土した。

SB-4

SB-3と重なり合う部分があり、SB-3廃棄後これに重複して造られている。長軸7m、短軸6m、床面積約29.3㎡（8.9坪・18畳弱）の規模を持つ円形住居である。支柱穴は6本で、2.3



第7図 SB-5実測図

m～3.2mの間隔で配置される。周囲には、幅6cm～14cm、深さ6cm～8cmの周溝がめぐるが、南側で切れる。残存壁高は10cm～20cmで中央には140cm×90cm、深さ40cmの屋内炉が掘りこまれ、そのそばには平石が置かれている。埋土は暗褐色粘質の単一土である。

出土遺物は、床面から壺の底部(第21図4)・大型蛤刃石斧(第23図16)・紡錘車(第23図18)・ガラス小玉(第25図)、周溝から紡錘車(第23図19)が出土した。

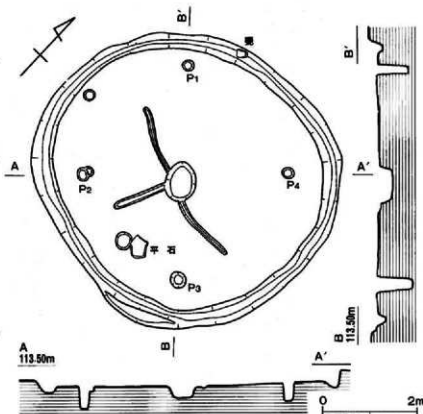
SB-5

調査区中央部に位置し、北側を旧参道により切られ、南側を中世の溝によって削平を受けている。そのため、残存壁高は中央部では38cmを残すが、南端部では4cm程度しかなく、床面はかろうじて残存している。平面形は円形をなし、直径10m、床面積約49.5㎡(15坪・30畳)の規模を持つ神田遺跡最大の住居である。主柱穴は7本までは確認されているが、本来は10本壁面に沿って2.2m～2.7mの間隔で配列されていたと思われる。周囲には幅8cm～18cm、深さ7cm～17cmの周溝がめぐるが南東部で切れる。中央には、130cm×90cm、深さ13cmの隅丸方形の屋内炉が掘りこまれている。

出土遺物は、床面から壺の口縁部(第21図9)・弥生土器片、周溝から壺の口縁部(第21図8)が出土した。

SB-6

調査区南端に位置する。長軸6.4m、短軸5.8m、床面積約22.4㎡(6.8坪・14畳弱)の規模を持つ円形の住居である。主柱穴は4本で間隔はほぼ一定しており3.2mを測る。周囲には幅6cm～18cm、深さ10cm～22cmの周溝がめぐる。壁高は30cmを残し、比較的遺存状態はよい。中央には、84cm×



第8図 SB-6実測図

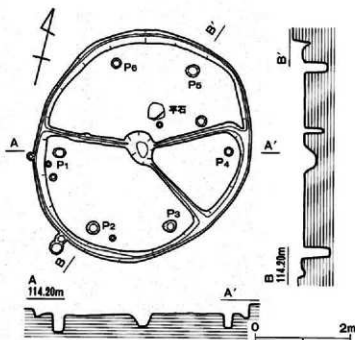
62cm、深さ28cmの長円形の屋内炉を持ち、内は炭が詰まった状態で検出され、炉の付近にも炭や焼土が広がっている。その炉から幅8cm、深さ3cm～5cmの3本の溝がのびている。溝の底のレベルは炉に向かって低くなっている。その南側には、平石が置かれている。埋土は灰褐色粘質の単一土である。

南壁中央部に、長さ160cm、幅25cm、高さ5cmの壇状の部分があり、この住居の入り口の施設に関係あるものと思われる。

出土遺物には、周溝の底から甕（第21図2）が、床面から弥生土器の細片が出土した。

SB-7

調査区南側、中央部に位置する長軸5m、短軸4.4m、床面積約14.3㎡(4.3坪・9畳弱)の規模を持つ円形の住居である。主柱穴は6本で、1.6m～2.3mの間隔で配置される。周囲には幅4cm～16cm、深さ6cm～8cmの周溝がめぐる。残存壁高は10cm～20cmである。中央には、70cm×50cm、深さ27cmの屋内炉が掘りこまれている。その北側には、平石が置かれている。埋土は黒褐色粘質の単一土である。



第9図 SB-7実測図

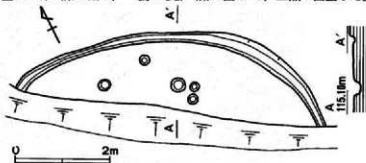
屋内炉と周溝をつなぐ幅

10cm～20cm、深さ10cmの3本の溝が検出された。溝の底のレベルは屋内炉に向かって低くなっている。

出土遺物は、床面から壺の口縁（第21図10）・甕の底部（第21図5・6）二点が出土した。

SB-8

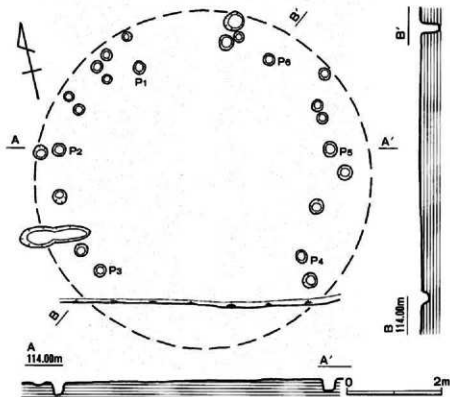
調査区南側、東端に位置する円形住居で、後世の土地開墾時の削平が著しいため壁面・周溝が残存するのは北側のわずかな部分のみ



第10図 SB-8実測図

である。周溝は幅6cm~18cm、深さ5cmである。残存壁高は7cmである。

出土遺物は、弥生土器片が若干出土した。

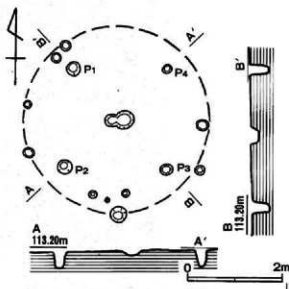


第11図 SB-9実測図

SB-9

調査区北側、旧参道沿いに位置する。後世の土地開墾時の削平を受け壁は残存しないが、柱穴群が規則的に環状に巡ることから住居と判断した。南側を旧参道によって切られているため、主柱穴は6本までは確認されているが、本来は7本壁面に沿って配列されていたものと思われる。柱間距離は2.1m~2.8m。屋内炉は検出されなかった。

SB-4の主柱穴から壁面までの距離を参考にして住居の規模を復元すると、直径約7mの円形住居と推定される。



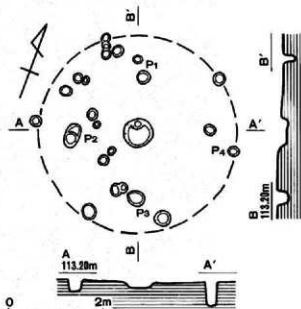
第12図 SB-10実測図

遺物は柱穴から弥生土器片が若干出土した。

SB-10

調査区北側、中央部に位置する。開墾時の削平を受け壁は残存しないが、屋内炉と思われる土壌を中心に柱穴群が規則的に巡ることから住居と判断した。屋内炉の径は40cm、深さ28cmである。主柱穴は4本で柱間距離は2mを測る。

SB-2の主柱穴から壁面までの距離を参考にして住居の規模を復元すると、直径約4mの円形住居と思われる。



第13図 SB-11実測図

遺物は柱穴から弥生土器片が若干出土した。

SB-11

調査区北側、SB-10の5m北に位置する。開墾時の削平を受け壁は残存しないが、屋内炉と思われる土壌を中心に柱穴群が規則的に巡ることから住居と判断した。屋内炉の径は60cm、深さ16cmである。主柱穴は4本で柱間距離は1.8m～2mを測る。

SB-2の主柱穴から壁面までの距離を参考にする住居の規模は、直径約4mの円形住居になる。

遺物は柱穴から弥生土器片が若干出土した。

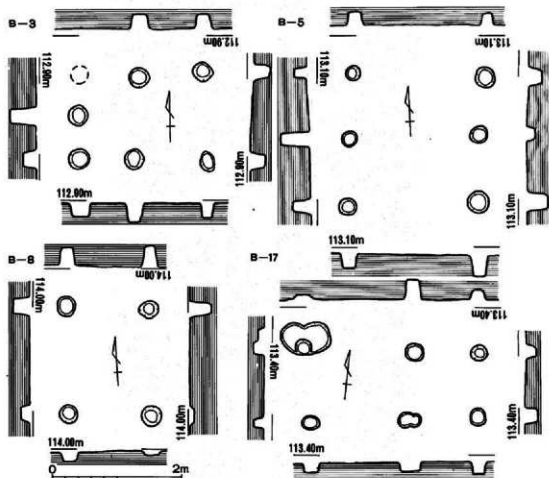
2. 掘立柱建物(第14図)

各調査区からは、疎密の差はありながらも、多数の柱穴とみられる小ピットが検出された。これらは、その多くが本来掘立柱の建物を構成していたものとみられるが、その数に比して明確に建物として復元し得る例は少ない。

今回の調査で確認された建物は17棟で、調査区の中央部付近には建物として組めるものはなかった。平面形は方形ないし矩形である。柱穴数からみると4本柱建物跡(1間×1間)10棟、6本柱建物跡(2間×1間)7棟である。以下、これらの建物について概要を記す。

B-1(中世) 調査区北側、北東部に位置し、身舎2間×1間の建物である。桁行長2.5m、梁行長2.0m。柱間距離は桁方向で1m～1.5m、梁方向で2mを測る。

B-2(中世) B-1の4m南側に棟方向を同じくして隣接する、身舎1間×1間の建物である。桁行長1.1m、梁行長1mを測る。



第14図 獨立柱建物実測図

B-3 (以下弥生) 調査区北側、SB-11の北東8mに位置し、身舎2間×1間の建物である。桁行長2m、梁行長1.1m。柱間距離は桁方向で0.8m~1m、梁方向で1.1mを測る。

B-4 B-3と北東部が重複する身舎1間×1間の建物である。桁行長2m、梁行長1mを測る。

B-5 SB-1の2m東に位置する身舎2間×1間の建物である。桁行長2.1m、梁行長2m。柱間距離は桁方向で1m、梁方向で2mを測る。

B-6 SB-1の4m南に位置する身舎1間×1間の建物である。桁行長1.7m、梁行長1mを測る。

B-7 B-6の西に棟方向を直交させて位置し、身舎1間×1間の建物である。桁行長1.3m、梁行長1.1mを測る。

B-8 SB-7の2m南に位置する身舎1間×1間の建物である。桁行長1.6m、梁行長1.1mを測る。

B-9 B-8の3m南西に位置する身舎1間×1間の建物である。桁行長1.9m、梁行長1.2mを測る。

B-10 SB-6の6m北に位置する身舎1間×1間の建物である。桁行長2.3m、梁行長2.1mを測る。

B-11 SB-6の1m北西に位置する身舎1間×1間の建物である。桁行長2m、梁行長0.9mを測る。

B-12 B-11の1m西に棟方向を直交させて位置する身舎1間×1間の建物である。桁行長1.6m、梁行長0.9mを測る。柱穴の一つからは、壺(第21図7)と甕(第21図1)の口縁部が重なりあって出土した。時期は弥生時代中期と推定される。

B-13 SB-4の4m南に位置する身舎2間×1間の建物である。桁行長2.8m、梁行長1.2m。柱間距離は桁方向で1.2m～1.6m、梁方向で1.2mを測る。

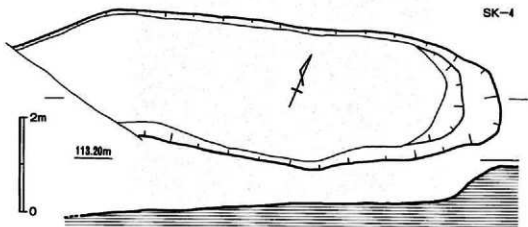
B-14 SB-4の南に位置する身舎1間×1間の建物である。桁行長2.4m、梁行長1.4m。

B-15 SB-4の南に棟方向をB-13と直交させて位置する身舎2間×1間の建物である。桁行長2.4m、梁行長1.3m。柱間距離は桁方向で1m～1.5m、梁方向で1.3mを測る。

B-16 SB-3の西1mに位置する身舎2間×1間の建物である。桁行長2.8m、梁行長1.2m。柱間距離は桁方向で1.3m～1.5m、梁方向で1.2mを測る。

B-17 SB-3の西3mにB-16と棟方向を直交させて位置する身舎2間×1間の建物である。桁行長2.8m、梁行長1m。柱間距離は桁方向で1m～1.6m、梁方向1mを測る。

3. 土 墳 (第15・16・17図)



第15図 土墳実測図(1)

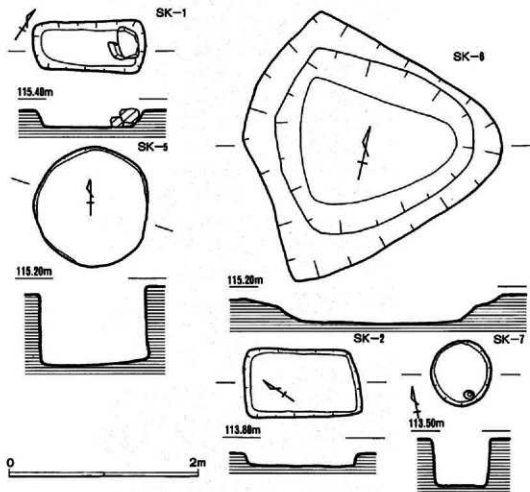
SK-1 調査区北側、東端に位置する。平面形は長方形で、長軸116cm、短軸50cm、深さ18cmを測る。平坦な底面から、土師器片数点出土した。中世の土墳墓と思われる。

SK-2 調査区北側、B-1の北に位置する。平面形は長方形で、長軸120cm、短軸70cm、深さ14cmを測る。平坦な底面から、土師器片数点出土した。中世の土墳墓と思われる。

SK-3 SE-1の北東部に位置し、SD-1の南西端にあたる。平面形は隅丸長方形で長軸2.7m、短軸1.2m、深さ0.4mを測る。SE-1に関係のある遺構と思われる。

時期は室町時代後半と推定される。

SK-4 調査区北側、SB-2の1m西に位置し、一部が旧参道に切られている。平面形は不整形で、検出した部分の幅は南北方向で3m、東西方向で9.2m、深さ0.8m～1.1mを測る。



第16図 土坑実測図2)

遺物は弥生土器片、土師器片、磁器片や鉄滓が出土した。

SK-5 調査区南側、SD-4の北に位置する。平面形は円形で、直径120cm、深さ80cmを測る。遺物は弥生土器片、大型蛤刃石斧(第23図17)が出土した。弥生時代中期の貯蔵穴の可能性がある。

SK-6 調査区南側、SB-8の北東に位置する。平面形は不整形で、幅は南北方向に280cm、東西方向に270cm、深さ28cmを測る。遺物は土師器片が若干出土した。

SK-7 調査区南側、SB-5内に位置する。平面形は円形で、直径62cm、深さ50cmを測る。遺物は土師質土器の皿(第22図15)が出土した。室町時代後半の土坑墓と思われる。

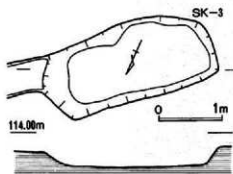
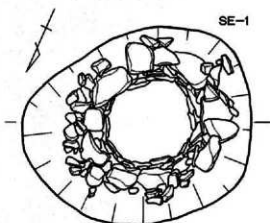
4. 井 戸(第18図)

SE-1 調査区北側、南東部に位置する。径1.51m~1.81mの不整な円形の掘り方をもつ

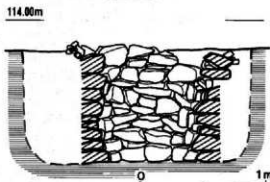
石組の井戸で、深さ約90cm。石組の上端内径約80cm、下端内径約70cm。長径10cm～40cm位の大小の石を用いて、ほぼ垂直に整然と積み上げられている。掘り方と石積の井側との間、つまり井側の裏ごめに川原石に交じって瓦質土器片が出土した。

1.5m 東には、SK-3が見られる。この井戸に伴う遺構と思われ、井戸に付属する洗い場の可能性がある。

時期は室町時代後半と推定される。



第17図 土坑実測図(3)



第18図 SE-1実測図

5. 溝 (第19図)

SD-1 調査区北側、SE-1の北東部から北東方向に伸び、途中で西に枝分かれする。検出された範囲での長さは24m、幅40cm、深さ8cm～10cmを測る。遺物は瓦質土器の鍋の口縁部(第22図13)、ホーロク(第22図14)、鉄滓などが出土した。この溝はさらに、調査区外へ北西方向に伸びていると推測される。溝の底のレベルはSE-1に向かうほど低くなっている。

時期は室町時代後半と推定される。

SD-2 調査区北側、SE-1の2m北に位置する。南北と東西に走る溝がほぼ直角に交り、T字状を呈す。かなり削平を受けており、幅30cm、深さ5cm～8cm、端は途切れた状態になっている。遺物は土師器片が出土した。

SD-3 調査区南側、西端に位置し東西に走る。西端は後世の開墾時の削平を受けており、東端は途切れた状態になっている。幅3cm～50cm、深さ12cm～50cmを測る。遺物は瓦質土器片が出土した。

時期は室町時代と推定される。

SD-4 調査区南側、SD-3と平行して走る。西端は削平、東端は途切れた状態になっている。幅2cm～30cm、深さ3cm～30cmを測る。この溝はSD-3と同様、東西に伸びるもの

と推定される。

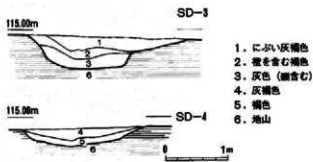
SD-5 調査区南側、東端から始まる溝が北に直角に曲がり中央部で西に折れ曲がった後SD-5付近で南に走る。西側はかなり削平を受けており、検出された部分の長さは63m、幅20cm～3m、深さ4cm～40cmを測る。遺物は瓦質土器の鍋(第22図12)、足鍋、五輪塔(第24図)などが出土した。

時期は室町時代後半と推定される。

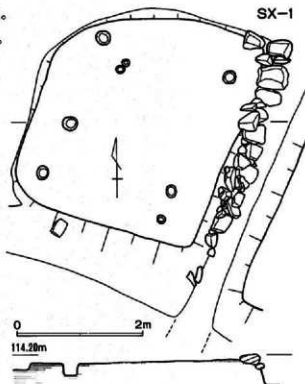
6. その他の遺構(第20図)

SX-1 SB-1の3m南西に位置する。長軸3m、短軸1.1mの不整形形で、径10cm～30cmの石が3～4個寄せ集められた状態で11個ほど検出された。遺物は甕の口縁部(第21図3)と埋土中から磨製石鏃(第23図20)が出土した。

SX-2 調査区南側、SD-5の南に位置する。東側に径10cm～40cmの石を組み東西方向に3.2m、南北方向に3.5mの方形の平坦面をつくる。石組の間から瓦質土器が検出された。SD-5からは、五輪塔が出土しており関連を匂わせる。



第19図 SD-3・SD-4断面実測図



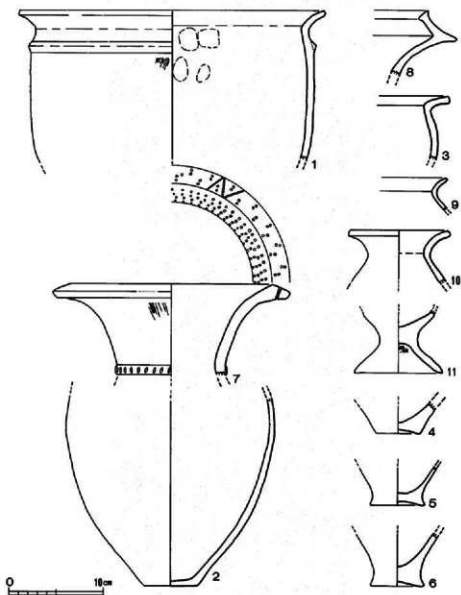
第20図 SX-2実測図

IV 遺物

1. 弥生土器(第21図)

甕(1~6)

甕形土器はいずれも口縁部、胴部、底部の破片である。1はくの字に外反した口縁下に一条の断面三角形の突帯を貼り付ける。外面ハケメ調整、内面指圧痕が見られる。2は平底の底部から胴部は上位で張りを持つ。3は口縁部でくの字に外反する。4・5・6は底部ですべて上げ底を持つ。



第21図 弥生土器実測図

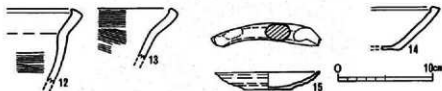
壺 (7~10)

壺形土器はいずれも口縁部である。7は大きく外に開いた壺の口縁部で口縁上面は平坦面をなす。頸部には刻目突帯を有する。口縁平坦面には2個単位の刺突文、へら描き歯文、内面にも2個単位の刺突文を巡らせる。平坦面には2個単位の穿孔が認められ、2~3箇所に施されたものと推定される。外面はハケメ調整、8は複合口縁。外反する口縁上部に内傾する立ち上がりが続く。立ち上がり端部はやや肥厚気味。9は口縁の破片でくの字に外反する。10は口縁が外反し、頸部がすばまって胴部に接続する。

台付鉢 (11)

上げ底の底部から内湾しながら立ちがる胴部が続く。底部はハケメ調整。

2. 中世の軟質土器類 (第22図)



第22図 中世の軟質土器類実測図

12・13は瓦質土器の鍋の口縁部。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は外傾し、端部を上方へつまみ出す。内面はハケメ調整。14は瓦質土器のホーロック。外傾する口縁は端部で肥厚し内側へ折れ曲がる。把手の長さは11.3cm。15は土師質土器の皿。口径11.2cm、器高1.9cm。器壁は非常に薄く、内外面とも回転ナデ調整。

3. 石製品 (第23・24図)

太型蛤刃石斧 (第23図 16・17) 16は全長13.0cm、最大幅5.7cm、厚さ4.0cm、重量483.8g。石材は流紋岩質凝灰岩。SB-4出土。17は刃部と基部を欠く。現存長12.0cm、最大幅5.2cm、厚さ4.2cm、現重量410.0g。石材は泥岩。器部側面に敲打痕あり。SK-5出土。

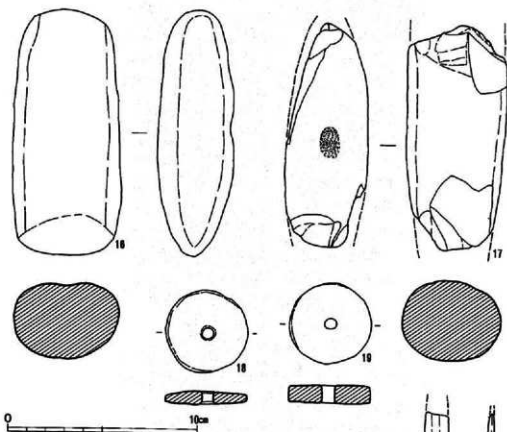
紡錘車 (第23図 18・19) 18は滑石製で、円板形を呈す。径4.2cm、孔径0.6cm、厚さは中ぶくらみとなり中央部で0.7cm、周縁部で0.4cmとやや薄くなる。重さ19.3g。SB-4床面出土。19は閃緑岩製で円板形。径4.3cm、孔径0.6cm、厚さ1.0cm、重さ36.2g。SB-4周溝出土。

磨製石鏃 (第23図 20) 20は泥岩製で、刃部を欠く。現存長5.1cm、最大幅1.6cm、厚さ0.3cm、現重量4.1g。SX-1出土。

五輪塔 (第24図) 22は砂岩製で、火輪。残存高7.3cm、幅17.2cm。底面と側面に擦痕があり砥石に転用されている。

4. その他の遺物 (第25・26図)

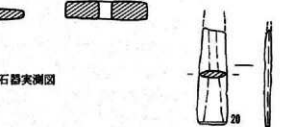
23は鉄銚の刃部と基部。刃部側辺を下方に湾曲させているため、表面中央に錆がつき、断面



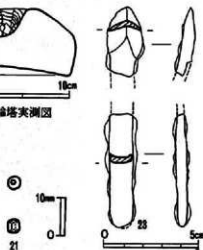
第23図 石器実測図

形は三日月形である。木質の残存はみられない。刃部長3.6cm、刃部幅1.9cm、刃部厚0.25cm、重さ4.9g、茎部長6.0cm、茎部幅1.3cm、茎部厚0.3cm、重さ10.7g。SB-3出土。

21は緑がかった青色のガラス小玉。材質はアルカリ石灰ガラス。径3.52mm、厚さ3.20mm、孔径1.5mm、重さ0.08g。SB-4出土。



第24図 五輪塔実測図



第25図
ガラス小玉実測図

第26図
鉄箭実測図

ま と め

今回の調査で神田遺跡からは、弥生時代の集落跡と中世期の遺構が確認された。検出された遺構は、堅穴住居、独立柱建物、土壇、溝、井戸と多くの柱穴である。また、これらに伴って弥生土器・土師質土器・瓦質土器・石器・鉄器・ガラス製品・五輪塔など各種の遺物が出土したが、数は多くない。そこで、これらの遺構と遺物のなかからここでは特に、弥生時代の住居群の様相についてとりあげ、まとめたい。

神田遺跡は江嶺山の西麓に形成された標高約 110m の舌状台地の先端部に位置する。台地を形成する地層は透水性の高い砂礫層で、そのため遺跡は比較的乾燥している。遺跡地の選定要件としては、このような快適な居住環境と、水田に利用されたと思われる低湿地の存在が第一にあげられよう。台地下の低位面は、西北には江嶺山の谷筋がはしり、西は長田川の氾濫源であり、江嶺山からの伏流水が造る広い低湿地である。米作りが定着した時期の弥生人の集落としては、神田遺跡は適当な立地条件であるとみてよい。

今回検出された弥生時代の堅穴住居は11軒であるが、弥生時代中期と推定される住居は5軒(SB-1・SB-3・SB-4・SB-6・SB-7)である。しかし例えば、SB-3とSB-4のように先後関係が認められることから、同一時期にすべてが並存したわけではない。5軒のうち同時存在可能な最大軒数は4軒と推定される。また、時期の不明な5軒の住居のうち、SB-2、SB-10、SB-11は形態・規模・構造が前述の住居と似通っている。あるいは、地形から考えて、舌状台地の西端部に数軒存在する可能性もある。これらの住居を総て同一時期と考えることもできるが、同時存在可能な最大軒数は $4+\alpha$ 軒ということになる。また、各住居の床面積からそこに生活した人数を計算すると(*1)25人~30人。この $4+\alpha$ 軒25人~30人を一つの単位としてムラが構成されていたと思われる。出土遺物からは、このムラの特徴を浮かびあらすほどの資料はない。

弥生時代の集落構成は、防府市井上山遺跡(*2)、阿武郡阿東町突抜・馬場遺跡(*3)、福岡県宝台遺跡(*4)、岡山県用木山遺跡(*5)など弥生中期の集落遺跡で明らかにされている。報告によると、それぞれ集落構成単位として5軒前後からなる単位集団が抽出されている。本遺跡で抽出された $4+\alpha$ 軒からなる単位も、これらの単位集団とほぼ共通したあり方を示していると思われる。

次に、弥生社会の食糧生産生活において重要な貯蔵用施設と住居の関係について考えてみたい。

貯蔵用施設としては、弥生時代前期の下関市綾羅木郷台地遺跡(*6)に見られる袋状土壇があり、ここでは居住地区と貯蔵地区が明瞭に区別されている。また、弥生時代中期の井上山遺跡では土壇が個別の住居に付属したものとなっている。突抜・馬場遺跡では、土壇とともに掘

立柱建物が貯蔵用施設として登場しムラの中央部に建てられている。弥生時代後期になると、阿武郡阿東町羽波遺跡（*7）等に見られるように土壇は姿を消し、ムラの共同管理としての掘立柱建物が居住区とは離れたところに現れる。

さて、神田遺跡では貯蔵用施設としての機能の推定される土壇は、SK-5のみである。これにかわる貯蔵用施設として考えられるのは15軒検出された掘立柱建物である。これらは、2間×1間、1間×1間で総柱構造ではないが、通常の居住用建物とするには規模が小さく、高床倉庫と思われる。そのうち、出土土器から弥生時代中期の掘立柱建物と思われるのは、B-12である。その棟方向から考えて、同一時期に存在可能な掘立柱建物はB-3・B-7・B-9・B-12・B-13・B-17の7棟であり、同時存在可能な住居軒数と近い数値であることが注目される。

さらにこれらの掘立柱建物の配置状況をみると、群集して存在する形態をとらずに、大半のものが住居に近接した位置にある傾向が指摘される。即ち、それらの対応状況を見ると、B-7はSB-1に、B-17はSB-3・4に、B-12はSB-6に、B-9はSB-7に近い位置にある。

こうした掘立柱建物の配置状況は、同時存在可能な住居軒数と掘立柱建物数とが極めて近い数であることと相まって、各掘立柱建物が、4+ α 軒の住居群ではなく、個別の住居に付属したものであった可能性がある。

こうしたあり方は、前述の居住区と貯蔵区の関係のどの類例にも当てはまらない。これが、時期差・地域性によるものか、あるいは集落の性格によるものか、さらに検討を要する問題であろう。

中世期の小村落は現村落に発展してひきつがれることも多く、現村落およびその近辺に発見されることはしばしばあり、地域の歴史を知る上で大変役立つものである。しかしそれ以上に約2000年前にさかのぼる弥生時代の集落の発見の意義は、今日の日本の文化の基盤となった文化が、どこにどのようにして定着し創造されていったかを知ることができるという意味においては、更に大きな役割を果たすものである。

*1 関野 克「埼玉県福岡村縄文前期住居跡と竪穴住居の系統について」

人類学雑誌52-8（昭和13年）

- | | | |
|----|-------------|---------------------------|
| *2 | 井上山遺跡発掘調査団 | 1977「井上山」 |
| *3 | 山口県教育委員会 | 1985「よみがえる弥生のムラー突抜・馬場遺跡一」 |
| *4 | 福岡市教育委員会 | 1970「宝台遺跡」日本住宅公園 |
| *5 | 岡山県山陽町教育委員会 | 1977「用木山遺跡」 |
| *6 | 山口県教育委員会 | 1989「綾羅木郷台地遺跡」 |
| *7 | 山口県教育委員会 | 1989「羽波遺跡 片山遺跡」 |

山口県埋蔵文化財調査報告第127集

神 田 遺 跡

平成元年度県営園地整備事業
に伴う発掘調査報告書

平成2年2月

編集 財団法人山口県教育財団

山口市大手町2130

山口県教育委員会文化課

山口市滝町1-1

山口県埋蔵文化財センター

山口市春日町3-22

発行 財団法人山口県教育財団

山口市大手町2130

山口県教育委員会

山口市滝町1-1

印刷 アロー印刷株式会社

(下関市新町10-3)
